

君たちの給料はなんぼや

「君たちの給料はなんぼや」

自分の仕事を、もっぱら「金銭」のみの観点から選択していくスタイルは、昨今の日本において格段不思議なことではない。

だが、幸之助の考える仕事の最終目標は、金銭や待遇ではない。そこに、尊さがある。

幸之助は、若い社員などと接する機会があれば、よくこう尋ねた。

「君たちの給料は何ぼや」

大体、正直な答えが返ってくる。

「その金額で満足してはるか」

満足の者もいれば、不満を示す者も中にはいる。

幸之助はこう続ける。

「なんぼでももらいたい気持ちはようわかる、けど君たちはまだ若い。たとえ今の給料が不満であっても、自分の心の中ではその倍ぐらいの働きをしてると思っても、その分は”社会銀行”に預金したと思いなさい。やがてそれが、大きな利息がついて自分に戻ってくる。その我慢ができるかできないかで、君たちの将来は大きく変わってくるんや。」

社会に貸しをつくる。それがのちに自分に戻ってくる。

この哲学のルーツは他ならぬ、幸之助の人生そのものであろう。

(「シリーズ偉大な日本人 松下幸之助」宝島社 より引用)